



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2015.1 第58号



提◆言

豚の系統造成とSPF

東京農業大学農学部教授

古川

つとむ
力

日本養豚学会は2014年に創立50周年を迎えました。その第100回記念大会を東京農業大学厚木キャンパスで開催したおりに、大会委員長としての挨拶にそなえて、養豚研究の歴史を振り返るために「日本養豚文献集」をひもときました。「日本養豚文献集」は養豚に関する文献を分野別に網羅したものであり、第1輯は学会設立10周年を記念して1901年(明治34年)から1972年(昭和47年)までの文献を収録しました。その後、1973年～1978年、1979年～1983年、1984年～1988年と第4輯までが刊行されています。しかし、1990年代になると畜産情報ネットワークや日本農学文献記事索引などの電子情報が充実してきたこともあり、その後冊子体の文献集は刊行されていません。

SPFについては、その第1輯の衛生分野において微生物、寄生虫、病理、臨床と並んでSPF豚の項目が立てられており、研究分野として関心が高かったことがうかがわれ、日本養豚研究会誌(現在の日本養豚学会誌)からは7編が収録されています。さらに、第2輯においても同様に6編が収録されていますが、第3輯と第4輯ではSPFという項目はなくなり、衛生一般の項目においてSPFに関する論文が収集されています。このことから、SPF技術は1970年代には完成し、普及に移されたものと思われました。

ところで、筆者は豚の育種研究に携わってきましたが、この分野も時代の変遷があります。わが国独特の豚の改良手法として閉鎖群育種による系統造成があります。先の文献集では第2輯から系統造成・選抜の項目が立てられ日豚研誌からは22件の収録があり、第3輯、第4輯でもそれぞれ14件、5件が収録されています。種豚改良事業としての系統造成は1980年代に最も盛んに取り組みされましたが、最近では新規に閉鎖群育種を開始するところが少なくなっています。

そもそも、三元交雑というピラミッド型の生産システムにおいて最も効率よく改良を行うことができるのが系統造成です。それは、ピラミッドの頂点にある中核育種集団(GGP)において集中的に改良を行い、その成果物を系統内で増殖し(GP)、GP間の交雑により生産した母豚(PS)の繁殖性に発現する雑種強勢効果を活用しつつ、発育と肉質のよい止め雄を交雑して肉豚を生産するというものです。これにより、頂点における遺伝的な改良が効率よく末端まで伝わり、遺伝的にも斉一な肉豚を生産できるというシステムです。系統造成は理論に忠実な育種手法ですが、一般に繁殖集団の規模が小さく、また増殖集団の構築が困難であるため、大規模養豚場からの要求に対して種豚を十分に供給できないという問題があります。

ピラミッド型の生産システムにおいては頂点から清浄な種豚を供給する必要があります。SPFにより清浄化する場合、系統が完成してからSPF化するか、SPF化してから系統造成を行うかという選択があります。前者の場合、系統造成の途中の疾病やSPF化の過程において後代を確保できない可能性があります。一方、後者は、ピラミッドの末端がコンベンショナル環境であれば、SPF環境で改良された能力が十分に発現できない可能性があります。これは、これまでの実験動物の研究において、悪い環境下で選抜した系統は良い環境下でも能力を発揮するが、良い環境下で選抜した系統は悪い環境下では能力を発揮できない傾向があったからです。しかし、SPF環境を有する研究所においてSPF化してから系統造成と普及を行えることが実証され、この手法に問題がないことが示されました。ピラミッドの頂点から底辺に遺伝子を伝えるためには、清浄な豚を末端にまで伝えるという仕組みも必要です。

PED対策や成績上位農場のデータを報告 SPF豚セミナー開催 恒例の最優秀農場表彰も

昨年11月6日、東京都千代田区のKKRホテル東京において、恒例のSPF豚セミナーが開催され、前年同様130名の参加がありました。概要は以下の通りです。

●認定農場成績10年の経過報告と上位農場の分析

認定基準に生産指数が盛り込まれてから10年が経過した。一貫生産・繁殖専門(繁殖I)・肥育専門(肥育II)の各部門とも改善が進んできている。レーダーチャート解析によると、生産指数が上位25%の農場ではA分類薬品費の貢献度が高かった。また、出荷頭数が上位25%の農場では、離乳時育成率が高い傾向にあった。

常に上位10位以内をキープする農場に、その秘訣を聞いたところ、①母豚のボディコンディションのチェック、②離乳頭数の絶対確保、③分娩率93%の維持、④分割授乳・里子の実施、等がキーポイントになりそうである。

●生産成績最優秀農場表彰 (今年で8回目)



総合生産成績部門で最優秀賞を受賞、挨拶する(有)サクセス森の小林久修専務

◆総合生産成績部門 最優秀賞

(有)サクセス森 (北海道、初受賞)

小林久修専務のコメント
「農場立ち上げから13年が経過し、マンネリ化してきていると感じていたが、この賞を機会に、再度モチベーションを上げ、またこの壇上に立てるようにしたい」。

◆商品化頭数部門 最優秀賞

(有)胆沢養豚 (岩手県、5年ぶり3回目)

高橋充好社長のコメント



商品化頭数で3度目の最優秀賞を受賞した(有)胆沢養豚・高橋充好社長



「8回のうち3回の受賞は誇りに思う。4月にPEDの侵入を許してしまい、哺乳子豚の死亡、発情再帰の遅れ、分娩率の低下と被害は甚大だった。しかし、これをケガの功名とし、生産を支える母豚の若返りを一気に図り、4回目の受賞にチャレンジしたい」。

●現場報告●周辺地域で拡大した豚流行性下痢症 (PED) の侵入をどう防いだのか 独)家畜改良センター宮崎牧場・中野英治衛生課長

(宮崎県小林市市)



独)家畜改良センター宮崎牧場衛生課長・中野英治さん

霧島山北東部夷守岳の東北東斜面に位置し豚約660頭(デュロック種、大ヨークシャー種)、肥育牛約490頭を飼育。職員数69名(一般職28名、技術専門職41名)。

ポイントとしては

①衛生水準の違いによる防疫区域の設定を明確化している。SPF豚舎基地は二重防護柵で、SPFエリア周囲の防護柵(内周柵)は高さ1.8m、サブエリア周囲(外周柵)は高さ2.6mで、どちらも柵の上に、外側に向けて有刺鉄線の忍び返しをつけている。

②車両消毒に関しては、PED発生前は牧場入口手動消毒(ビルコンS)、家畜飼育区域入口自動消毒(パコマ・グルタプラス)としていたが、発生後は、関係業者車両には地域の消毒ポイント経由を義務付け、牧場入口では職員立ち合いで、運転席までアルコール消毒するようにした。また、牧場入口と家畜飼育区域入口

の間に、消毒マット（ビルコンS）を設置した。1回の消毒では効果が上がらないので、3回以上の消毒となるよう心がけて対応した。

③人については、豚舎工事関係者、猟友会の入場は一時中断した。また、職員の事前の移動もさらに細かく制限した。

④紙袋飼料、物品は過酢酸煙霧消毒を行っている。紙袋飼料は2回行う。

⑤職員の私有物（携帯、弁当）はアルコールおよび紫外線消毒。

問題点としては、

①牧場入口で交差汚染が考えられる、②工事関係者および猟友会の入場を中断しているため、工事および有害獣駆除が滞っている、③場内車両は職員移動用を優先しているため、車両不足をきたし、一部車両を場外業務で使用せざるを得ない、④宮崎県内に位置するという理由から、種豚および精液の配布が敬遠される、等がある。対策として、①内部車両と外部車両の消毒場所を別々にする、③必要最小限の車両を増やす、が考えられる。②、④については検討中である。

(株)ファームテック・西原 登社長（宮崎県えびの市）



(株)ファームテック社長・西原 登さん

防疫対策で強化したことは次の通り。

①車両は、消毒→水洗→乾燥（温風機使用）→さらに消毒を行っている。トラックは前輪を傾斜つけたコンクリートに上げ、荷台を斜めにして、上記作業を行う。

②事務所、豚舎入口では、踏込槽、手洗いともに2種類の消毒薬を並べて置き、長靴、手の消毒を徹底している。

③パスボックスは金網の下部に下駄をはかせて金網を浮かせ、その上に弁当・携帯等の物品を乗せる。パスボックス下部には反射板を設置し、物品の下側も紫外線が当たるようにしている。

④場内道路は毎日、消毒薬を散布する。

⑤豚舎内用長靴と豚舎外用長靴は色を変える。



セミナー終了後行なわれた懇親会

⑥長靴洗浄機（約25万円）を設置。人の手では洗い残しがでる。

⑦煙霧消毒装置（オキシリンク・フォグ）を退勤時にセットし、事務所→洗濯場→更衣室（ロッカーの扉も開けておく）の日替わりローテーションで運転。

⑧豚舎も煙霧消毒（オキシリンク・フォグ）を行い、既設のファンを利用して広範囲に広げる。

⑨石灰スプレーは、作業性を考慮して、大型のもの（100リットル）を使用している。

⑩飼料は当场専用バルク車で場外受け入れタンクに投入、受け入れタンクから場内各豚舎へ自動搬送ラインで送る。

しかし、一番大事なものは「絶対に防ぐ」という心構えであり、「やるべきことは全てやる」という姿勢である。さらに、やり残したことはないか、自分に厳しく問うことであると思う。

宮崎県は6年前口蹄疫の洗礼を受け、甚大な被害を出した（当時の状況を改めて紹介）。防疫対策の戒めとしたい。その時、痛切に感じたのは、行政および地域住民に、地域経済へのダメージがどれほど大きいかを理解してもらい、防疫対策に全面的協力を得ること、同時に、行政と連動した迅速な行動がいかに大事か、ということである。

セミナー終了後には引き続き同じ会場で懇親会が開かれ、110名を超す方にご参加いただきました。恒例のSPFポークしゃぶしゃぶや骨付きハム、ソーセージなどの加工品も並びました。貴重な情報交換の場となったかと思います。講師はじめ、ご出席・ご協力いただいた方々、ありがとうございました。

あなたや周りの人が風邪をひいた時、俗に「風邪の華」と呼ばれる水疱が口や目の周りにできた経験はありませんか。また、带状疱疹という病気の人をみたことはありませんか。この原因はもちろん本病ウイルスではありませんが、これらもヘルペスウイルスの仲間の仕業によって起こる再発時の症状です。人は豚と違い、潜伏感染場所となっていた神経に沿って皮膚病変が顕著に現れます。ちなみに带状疱疹の初感染は水ぼうそうで、潜伏部位の多くが脊髄近くの知覚神経節で、肋間神経に沿って水疱がでるのでこう呼ばれています。

本病の豚では皮膚病変など臨床症状として再発を発見することができないため、健康な豚と思っていても知らず知らずのうちにウイルスをばらまいていることがあります。そのため、農場内にまん延して分娩舎などで臨床症状を現わすまで、本病ウイルスの侵入に気づかないことが少なくありません。

抗体検査による潜伏感染豚の摘発：では、このように厄介な潜伏感染豚を見つけ出す手立てはあるのでしょうか。神経に隠れているウイルスを見つけ出すことは容易ではありませんし、そもそもそうした神経を調べるためには豚を解剖しなければなりません。また、潜伏感染豚はウイルス血症となっていないため血液からのウイルス検出はできませんし、いつ起きるかわからない再発を待つて鼻汁などからウイルスを検出するわけにもいきません。ところが、潜伏感染豚は抗体を常に産生しており、たとえ再発時でも血液中の抗体を検出することができます。つまり、潜伏感染豚は抗体陽性豚であって、逆に抗体が検出できる豚は潜伏感染豚ということができません。抗体検査はわが国にオーエスキー病が侵入した当初は検査網も含め整備されていませんでしたが、届出伝染病に指定された侵入2年後(1983年)からは、全国的に定期的な抗体監視調査(サーベイランス)が続けられてきています。

病気として見えないゆえの清浄化の難しさ：なぜ、早くからオーエスキー病の浸潤状況を把握していたにもかかわらずなかなか清浄化が進まなかったのでしょうか。潜伏感染豚を抗体検査によって摘発して淘汰すれば容易に清浄化できたと思われる方もいらっしゃるでしょう。しかし、すでに多くの潜伏感染豚が存在し、しかもそれらは健康に見えることから淘汰が進まないという問題があ

りました。まして複数年にわたって飼養される経済価値の高い繁殖豚ともなればなおさらです。清浄化を進めるためには、それら潜伏感染豚が再発しないようにしつつ、経済的あるいは心情的に生産農家に配慮した潜伏感染豚の排除方法が必要です。

本病の清浄化に成功した海外の事例をみると、確かに浸潤農場における潜伏感染豚群の排除は基本的に通常よりも積極的な出荷や早期の更新によって行われています。しかし、「潜伏感染豚が再発する」→「未感染豚に感染する」→「潜伏感染豚となる」という感染環を完全に断ち切ることができません。そこで、ワクチンを使用して感染環を切りつつ、更新が行われます。

清浄化におけるワクチンの役割：ワクチンには、①発症を防ぐあるいは発症しても軽症で済む(発症防止)、②ウイルスの再活性化および潜伏感染からの再発を防ぐ(再発防止)、③自然感染をしづらくする、④ウイルス排泄を抑え移しづらくする、という効果があります。ワクチン免疫しておくことと重篤化しやすい幼若な豚であっても症状が抑えられ、母豚の早流産や死産を防ぐことができます。また、母豚へのワクチン免疫は母乳を介しての移行抗体によって哺乳豚も発症が抑えられることとなります。自然感染し潜伏感染している母豚でも二度目の自然感染では母豚も哺乳豚も同様に発症軽減といった傾向を示しますが、潜伏感染からの再発は起きます。その点、ワクチン免疫豚は自然感染の前でも後でもその免疫のタイミングに関係なく再発はなくなることから、潜伏感染豚となっても感染源となる心配はいりません。また、ワクチン免疫豚は自然感染を完全に防ぐことはできませんが、自然感染するために必要な感染性ウイルス量(感染閾値といいます)を高くし、同時に感染直後から排泄されるウイルスの量が減り、期間も短くなります。浸潤農場には潜伏感染豚と未感染豚が混在しているわけで、潜伏感染豚のみならずすべての豚を免疫しておくこと、農場内での豚から豚にウイルスが伝播する確率や速度を低下させる効果も得られます。効果のあるワクチンですが、生ワクチン(感染性のあるウイルスの一種)であることから、役割を終えた時点で速やかにワクチン接種を止めなければならないことも念頭において使用しなければなりません。(以下次号)

人間社会に迫り来る大型獣類たちⅢ

岐阜大学応用生物科学部教授 鈴木 正嗣

近年、野生動物管理の分野では「アーバン・ワイルドライフ（都市型野生動物＝都市環境を日常的に利用しつつ繁栄している動物たち）」という用語がキーワードとなっています。今回は、このアーバン・ワイルドライフ、そして都市環境を日常的に利用するようになったイノシシ（アーバン・イノシシ）の問題を紹介しようと思います。

◆アーバン・ワイルドライフをめぐる現状と課題

アーバン・ワイルドライフとして最もイメージしやすいのがカラスでしょう。カラスは、管理の行き届かないゴミ捨て場を餌場とし、市街地や公園内の立木等も営巣木として利用することがあるためです。家屋に営巣するツバメや衛生被害をもたらすネズミ類もアーバン・ワイルドライフと位置づけることができます。最近では、タヌキやキツネ、ハクビシン、アライグマも都市圏に住み着くようになり、すでに一部では社会問題化しています。海外では、アナグマやコヨーテ、オジロジカ、ポッサム等、多数の事例が報告されています。

近年、街中に出没し人を襲うサルが問題となっていますが、このような実害がない限り、都市に現れた動物については「歓迎・見守りムード」で報道されることが少なくありません。加えて、「開発により食べ物や住処を奪われた」との通説を前提に、「餌を求めて現れた」と紹介する記事も目にします。しかし、本連載1回目にも記したとおり、この前提は必ずしも正しいとは言えません。人を恐れない個体や生息数自体の増加に起因する可能性があるためです。

アーバン・ワイルドライフには、人や家畜に感染症をもたらすリスクもあります。北海道のキツネはエキノコックス症の感染源となりますし、シカなどがリケッチア症やSFTS（重症熱性血小板減少症候群）の原因となるマダニ類を運び込む可能性も指摘されています。ゼロリスクを求めるあまり神経質になり過ぎるのも問題ですが、アーバン・ワイルドライフ対応には感染症予防の観点も忘れてはなりません。

◆アーバン・イノシシ問題の経緯と課題

神戸市などでは、市街地に侵入するようになったイノシシが「人につきまとい危害を加える」、「庭を荒らす」、「ゴミを散らかす」、「車との衝突事故を起こす」等の問題が発生しています。さらに、市街地侵入の最大の要因が、一部住民による「餌付け行為」であることも明らかにされました。そのため神戸市は、2002年、餌付けの禁止等を定めた「神戸市いのししの出没及びいのししからの危害の防止に関する条例（通称：イノシシ条例）」を制定しました。

しかし、神戸市では条例に反し餌やりを続ける住民は後を絶たず、人身事故の増加も認められたことから、2014年に本条例は改正されました。改正後の条例には、餌付け中止の勧告に従わない者に対する「氏名公表」などの対応も盛り込まれています。

神戸市のアーバン・イノシシに関わる一連の経緯は、これからの日本の「人と野生動物との関係性」を考える上での重要な示唆を与えてくれます。餌付けを続ける方には、それを通じ「動物とのふれあい」を楽しみたいという動機のみならず、「お腹を空かせてかわいそう」という慈しみの気持ちもあるとされています。しかし、国が定めた「生物多様性国家戦略2010」では、「野生鳥獣に対する地域住民や観光客の理解不足から、安易な餌付けや不適切な生ごみの処理、未収穫作物の放置が行われている状況は、給餌への依存、人慣れなどにより、鳥獣による生活環境や農林水産業などへの被害発生の誘因となり、生態系や鳥獣の保護管理へ影響が生じるおそれがあります」と明記されました。現実に神戸市のアンケートによれば、24%の住民が「何らかの被害を受けたことがある」と回答しています。

もちろん、「野生動物をまもりたい」という思いは尊重すべきです。しかし、「生物多様性国家戦略2010」が指摘するように、人と野生動物の間では、適切な距離感が保たれねばなりません。神戸市におけるアーバン・イノシシ問題は、この距離感の必要性を示す実例として、重要な意味を持つと考えられます。

（編集部註：紙幅の都合により参考文献は省略しました）

東の匠SPF豚研究会(千葉県東庄町)が農林水産大臣賞(最優秀賞)を受賞

昨年11月14日、東京都千代田区の日比谷図書館日比谷コンベンションホールにおいて開催された平成26年度全国優良畜産経営管理技術発表会(公益社団法人中央畜産会主催、第54回農林水産祭参加行事)で、最終審査に残っていた協会認定農場の生産者グループ、東の匠SPF豚研究会(千葉県東庄町、会長:高木敏行(有)東海ファーム社長)が農林水産大臣賞および中央畜産会長賞(最優秀賞)を受賞されました。

この賞は中央畜産会が全国で行なうコンサル活動を通じ、優秀な実績を収めていたり、課題解決に取り組んでいる畜産経営またはグループを審査表彰するものです。

東の匠SPF豚研究会は審査委員長の講評で、定例検討会開催で情報を共有しグループ全体の技術向上を図っていること、全会員が高い技術水準を維持していること、飼料の共同購入等による低コスト化、均一化を果していること、マーケティングの工夫、商標登録

による地元ブランド創設など、多方面での成果が高く評価され、本年秋に決定する農林水産祭の天皇杯候補に残りました。

当日見事な発表を披露した高木会長は「これで満足することなく、頂点(天皇杯)を目指したい」と抱負を述べられました。

誠におめでとうございます。



表彰式の高木敏行さん(左、有)東海ファーム)と實川浩通さん(實川養豚)



事例発表の様子

(有)伊藤ファームが最高賞の農林水産大臣賞および知事賞を受賞

長崎県南島原市の認定農場、(有)伊藤ファームは、平成26年度「ながさき農林業大賞」の最高賞、農林水産大臣賞および知事賞を受賞されました。この賞は、地域の特性を活かして魅力ある農林業を展開し、優れた成果をあげている農林業者を表彰するもので、今回で9回目となります。大賞はすべての応募者の中から1件のみ。伊藤ファームは母豚350頭規模の一貫経営で、SPF管理による衛生面の徹底や優れた生産性、ヤシの実の搾りかすなどを混ぜた独自の飼料を使用した豚肉のブランド化などが高く評価されました。

昨年11月22日、長崎市元船町のサンプリエールにて開催された表彰式には社長の伊藤暢啓さんと奥さんの恵子さんが出席、県知事より表彰状を授与されました。

伊藤社長は取材に対し「受賞が決まったときはみんな喜びました。家族や従業員と努力を重ねた結果だと思いますが、光栄に思うのと同時に身が引き締まる思いです。防疫体制を徹底し、健康で安全・安心な豚

肉生産に最大限努力しています。今後は、おいしい豚肉を供給したいという思いを胸に、規模拡大やさらなる生産性向上を目指し、家族・従業員全員で真剣に取り組んでいきたい」とコメントを発表されました。

相次ぐ受賞は認定農場の高い生産技術と優れた経営努力の賜物であり、誠に喜ばしいことです。おめでとうございます。



表彰を受ける(有)伊藤ファームの伊藤暢啓社長と奥さんの恵子さん



最前列左から5人目・6人目が伊藤さんご夫妻

誠に喜ばしいことです。おめでと

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

ちくさんフードフェアに出展、来場者数は過去最高 しゃぶしゃぶ試食が大好評

協会では昨年10月11日（土）、12日（日）の2日間、「ちくさんフードフェア」（神奈川県川崎市、主催：（財）日本食肉流通センター）に、4年連続5回目の出展をいたしました。晴天に恵まれた前回、過去最高の12万8,000人の人出を記録しましたが、今回はそれを上回る13万2,000人と2年連続で記録更新となりました。特に2日目が大幅な増加となったようです。

協会では、ピラミッドの協力のもと、恒例のしゃぶしゃぶの試食、アンケート調査、抽選会を行ないました。また、パネルも展示し、協会および認定農場パンフレット、販売情報、SPFポークリーフレットなどを配付しました。しゃぶしゃぶの試食は相変わらずの大人気で、長蛇の列ができました。今回からアンケートにご協力いただいた方に抽選でプレゼントする賞品をSPFポークの加工品に変更（後日郵送）、アンケー

トの精度があがったと思われます。

また、今回も東京農業大学の学生さんに豚の着ぐるみを担当いただき、PRにご活躍いただきました。

遠方より会場にお越しいただいた方々、ご協力いただいたピラミッドの皆さん、ありがとうございました。引き続きSPFポークの普及のため、このような取り組みを続けたいと思います。



●協会からのお知らせ●

●代議員・理事の交代

シムコピラミッド選出代議員で理事の三枝泰裕氏に代わり、鈴木 保氏（株シムコ代表取締役社長）が就任されました。鈴木さんには前任者に引き続き副会長

をお務めいただきます。

（編集部より）

都合により、「SPFのお店」と「プロのシェフおすすめ、かんたん、おいしいSPFレシピ」は休載します。

●認定情報●

●平成26年度認定農場

[12月認定]

（有効期間：平成26年12月11日から27年12月末日まで）

北海道・ホクレン滝川スワイン・ステーション、(有)道南アグロ、富良野スワインファーム(有)、(有)山中畜産千歳農場、(有)中多寄農場、(有)サクセス森、青森県・(有)ふなばやし農産、同第3農場、神明畜産(株)八戸ファーム、岩手県・(有)ケイアイファウム玉山農場、斉藤SPF農場、(有)胆沢養豚、カワムラSPFファーム、北日本JA畜産(株)本社農場、(農)八幡平洋野牧場、秋田県・(有)ポークランド、(株)ユキザワ雪沢農場、山形県・(有)最上川ファーム、(有)鮭川ピッグファーム、宮城県・(株)しまぎ牧場蔵王高原農場、福島県・神明畜産(株)川内ファーム、(株)ユキザワ玉川農場、茨城県・(有)常陸牧場、(有)米川養豚場、群馬県・(有)長谷井畜産、ピックファー

ムゴカン、利根沼田ドリームファーム(株)、千葉県・實川養豚銚子農場、同東庄農場、綱島良信養豚場、高森養豚場、小長谷養豚場、(有)菅井物産SPF農場、岡山県・岡山JA畜産(株)吉備農場、広島県・(株)広島ポーク、愛媛県・(株)ユキザワ大川農場、(株)ユキザワ丹原農場、大分県・(株)北九州ジェイエイ畜産大分SPF豚種豚農場、(株)北九州ジェイエイ畜産大分支社SEW安岐ファーム、長崎県・(有)芳寿牧場口之津農場、同国見農場、同島原農場、同新島原農場、同新国見農場、(有)エス・イー・ダブリュー大西海ファーム、宮崎県・江夏商事(株)夏尾農場、(有)ナガトモ、鹿児島県・(有)サツマ湧水事業所、(株)シムコ鶴田事業所阿久根農場、そお元気ファーム(株)持留農場、同久保崎農場（以上52農場）

※次回認定委員会は平成27年3月12日（木）の予定



(株)シムコ
大館GGPセンター
館澤 軒さん
●秋田県大館市

主幹農場を支える現場一筋の場長

協会シムコ生産ピラミッドの最新GGP農場である大館GGPセンター(母豚300頭)は、2012年5月に竣工されました。2014年1月にフル稼動になって1年、館澤軒さんは初代センター長です。

館澤さんは宮城県築館(現栗原市)のご出身。畜産専門の短大を卒業後、2度のアメリカ研修を経てシムコに入社されました。「もともと祖父が養鶏をしていた時期もあり畜産はきれいではなかったけれど、まさか豚をやるとは思わなかったですね」。

千葉県館山事業所、宮城県岩出山事業所とGP農場に勤務後、富山県の八尾GGPセンターに11年。大館市の強い誘致もあってGGPセンター建設が決まると、長年のGGP農場での実績が評価され、大館に転勤、4年前の立ち上げ時からその切り盛りを任されました。

一番大変だったのは雪と寒さ。「秋田では雪の少ない地域だと聞いてたんですが、とんでもなかった(笑)。冬への備え、実際の除雪作業は場長の仕事ですから」



農場排水が流れ出る池にはイワナが泳ぐほど澄んだきれいな水が。



と館澤さん。作業もさることながら「こまごまとした事務処理が大変で…。体を動かすのはきれいではないんですが」。どうやら根っからの現場人間ようです。

若い時は長い休みがとりにくかった農場勤務、岩出山時代に結婚した山口県出身の奥さんとは新婚旅行も行っていないのだとか。「東京で挙式したのが遠出かな」。現在は宮城県古川市の自宅に奥さんとお子さん3人を残し単身赴任中です。「『軒』という名は、初孫だった私に祖父が『家を守ってほしい』という思いでつけてくれたんですが、残念ながらそうはならなかったですね」。

趣味は富山時代からの海釣りですが、今は海が遠くなかなか行けないそうです。時間のとれる週末、自宅に戻って末娘と遊ぶのが「唯一のストレス発散かな。上の2人(中2の息子さんと小6の娘さん)はそれぞれ忙しく相手にしてくれません(笑)」。

農場産豚肉を大館市が地元特産品としてブランド化する取り組みもスタート(詳細は次号で紹介)、「大館の人に、『来てもらってよかった』と言ってもらったのが一番うれしいですよ」。日々の大変さをこぼす中にも、地域貢献への自負、誇りが垣間見えました。(編集部)

編集後記

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお祈りします。「5S」という言葉をご存知かと思います。言わずもがなかもしれませんが「整理・整頓・清掃・清潔・躰」の頭文字をとったものです。今年はこの「5S」に2S「水洗・消毒」を加えた「7S」を農場管理の心構えにしてみたいかたがたでしょう。その根底には「One for All, All for One(1人はみんなのために、みんなは1人のために)」の精神が必要です。気持ちのベクトルを合わせると想定外の結果が! 楽しみな1年になるのではないのでしょうか。(世)



日本SPF豚協会認定農場産
このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第58号 2015年1月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail: j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀